

共同注意と社会的参照からみた母子相互交渉

向井美穂

お茶の水女子大学人間文化研究科

[問題と目的]

乳児の母親との相互交渉場面における母親への注視行動はノンバーバルコミュニケーションの一つとして重要な役割を果たす。母親の乳児に対する発話は乳児から注視されている時により増加するという研究からもわかるように前言語期の乳児にとって母親への注視行動は重要な伝達手段である。

また、従来の研究からは母子相互交渉スタイルを規定する要因として乳児の気質、母親の感受性、環境等が挙げられる。そうしたものを含んだものとして母子間でのやりとりによる経験が考えられるが、それによる影響を検討した研究は少ない。相手を注視した際に何らかの反応を得る経験を重ねた母子にとって、その相互交渉場面における注視行動は次第に強化されていくことが考えられる。そこで、本研究では自由遊び場面における母子相互交渉での乳児の母親への注視行動の量的差により2群にわけた時、各群はその後の実験場面での母親との相互交渉において質的な差をあらわすという仮説を基に検討する。

臨床的な問題を持つ母子との比較ではなく一般的な母子を対象とすることで母子間での経験による影響の普遍性を探ることとした。

[方法]

対象：生後17～22ヵ月で心身の発育に特に問題の認められない乳児とその母親30組。

手続き：①母子の自由遊び場面（3分間を抽出）での乳児の母親への注視回数の合計により2群に分ける（高注視群・低注視群）。さらに母親の発話についても分析する。

②各群における新奇刺激（電動玩具）への乳児の反応、刺激に対する母親と

の共同注意の成立のさせ方について検討する。

また、本実験では乳児の行動には特に規制を設けず、母親の与える情報のみを統制することとする。

[結果と考察]

①自由遊び場面での乳児の母親への注視回数の総数は151回、平均5.03回であった。注視回数6回以上の群を高注視群（12名）、5回以下の群を低注視群（18名）とした。また、各群により母親の乳児への発話内容にも差がみられた。

②実験場面での2群の母親への注視回数 ($t(14.5) = -4.80, p < .05$)、刺激を見てから母親を注視するまでの時間 ($t(27.9) = -2.47, p < .03$) ともに有意な傾向がみられた。

こうした結果から高注視群は低注視群に比べて母親との共同注意を成立させるためにより積極的に母親へ働きかける傾向にあることが窺われた。

母子相互交渉スタイルを母親への注視行動の量的差により2群に分けた時、2群の母子間でのやりとりは質的にも異なることが推測された。自由遊び場面での母子相互交渉において母親への注視頻度が高い乳児は、実験場面で母親の注意が向けられた対象に選択的に関心を寄せ、母親からの情報をより求める傾向にあると考えられた。

そうした母子相互交渉スタイルの違いはどこから生じるのかについて今後詳細に検討していくこととする。